

県北 どらくろあ

第90号 2023年9月1日（毎月1日発行）

郷土の本棚⑩（文責・赤川仁洋）

「広島県北部の地名」（菁文社）

木村健次 著

本来ならば、木次線の油木駅をレポートするはずだった。いや、先月の8月号で、油木駅を書く予定だった。それが先延ばしになっている。ただただ、この猛暑に怯んだのである。

一年馬齢を重ねて、体力は確実に落ちていく。この猛暑の中、国道のアスファルトの上を歩く自信はなかった。残暑の厳しい9月も危ういか（苦笑）。

芸備線ストロールでは、一駅区間列車に乗車して、車を停めた駅まで歩いて戻るのがルーティンだった。ただし、一区間だけ歩いていない場所がある。去年の八月だった。備後八幡駅から列車に乗って東城駅で下車。町中を散策した後で、五品嶽城跡に登ったのだが、猛暑の中での取材に疲労困憊、備後八幡駅まで歩く余力はな

長々と言いつつ書いて、今回は地名の由来を考察した本で、1992年出版。巻末の著者略歴によれば、木村健次さんは昭和6年（1931年）和歌山県生まれ、健在であれば90歳を超えている。林野庁の元職員で、三次の地で二回、通算四年勤務していたようだ。三次と書いて「みよし」と読む。どうしてそんな読み方をするのでろうと疑問に思ったのが、地名に興味を持ったきっかけ。

からか、旅行者で混雑した車内の光景に驚いた記憶がある。

この本を紹介しようと思ったのは、「笑田」のことが書かれていたからだ。芸備線ストロールで、内名駅から小奴可駅まで歩いたときだ。ネットからプリントアウトした地図に「笑田」の地名を見つけて興味を持って、地名の由来を確

認しなかったのだが、足の痛みや道に迷ったこともあって断念した。

「小奴可駅の少し下に字笑田（あざわらうた）がある。古いことばに『わろうた』というのがある。円座のことで、藁・藁・蒲・菅などを渦巻き状に編んで、円形に作った敷物（『日本国語大辞典』だそうである。『わらうた』は「わろうぎ」の転で、円座のように円い田のことらしい。」

構造改善された四角形の田ばかりの現在では、笑田を見ることは難しい。

同じような意味で、丸田という地名がある。県北では、吉舎町の大字名である。「地名の語源と謎」（丹羽基二・南雲室）によると、「丸田」という地名は、全国にある。文字通り、丸形のタンポに違いない。丸形といっても、完全に円形につくるはずがないから、自然に湾曲しているような処をいう。：曲田や輪田はほとんど和田という字になってしまった。『曲』や『輪』は書きづらい。感じがよくない。そこで『和』の字を当てた。それに反して『丸』はわるい字ではないから、そのまま通用している。

田の付く地名に対する考察が、馴染みがあるだけに興味深い。『門田』と書いてモンデンとかモンデと読む地名は、高野町・庄原市・作木村・三次市・高宮町の五市町

村にあり、高野町には大字中門田・下門田・奥門田、作木村大字門田には字門田中・門田上があるから、都合九カ所になる。ほかに門出が三カ所で、門田系の地名は計一二カ所になる。」

中世の在地領主は山上に城郭を築き、平時はその山麓に構えた館で過ごした。その館のあるところを屋敷地とか敷地といい、屋敷の正面にある開発田を門田といった。のちに屋敷地の周囲にある田を含めて門田というようになった。この場合は寺院の門前をさす場合が多いという。

中国新聞の「地名人名考⑩」の記事では、門田を「寺領の門田」としている。神田（じんでん・かんだ・こうた）は、社領の田。カンダの場合は文字は同じでも、田神を迎えるいわゆるサンパイオロシが行われた祭田と考えられる。

新開・今田、切田、福田、想田・惣田、等々、地名の由来を考察すると、愛着や興味が増してくる。わたしの名字である赤川、歴史好きの友人に、合戦があった土地の由来ではないかと冗談半分に言われたことがある。多くの血が流れたので赤川。





岐阜県高山市で受け継がれている車田（笑田？）



比和町の吾妻山の山頂。イザナギの命が帰ってきたときに「噫々吾が妻よ」とイザナミの命を呼んだという伝承がある。

庄原市峰田町の本村川沿いの町に赤川の地名がある。合戦があったという伝承はない。そして、西城川と比和川の分かれのところに、濁川町がある。本村川も比和川も、たたら製鉄の本場で栄えた場所であるから、かなな流しの赤い濁り水が流れていたのだろう。どうやら、それが地名の由来であるようだ。

たたら製鉄関連では、毛無山がある。西城町と島根県横田町の境の毛無山、西城町と比和町との境、高野町と島根県吉田村との境に毛無山、もう一つ高野町大字下湯川の奥にも毛無山がある。島根県の県境付近に集中していて、南部にはない。毛無しは木無しで禿げ山。県北は砂鉄の産地で、掘り返されて禿げ山になったとか、たたら製鉄の木炭用材として木を伐り尽くして、毛無しになってしまった山が多かったのだから。

山つながり吾妻山。全国的に多い山名で、県北では比和町と島根県横田町との境にあり、もう一つは君田村に近い口和町竹地谷にある。比和町の吾妻山は、古くは阿国馬山と表記されていたそう。西城町に伝わる神話伝承では、全国巡幸中のイザナギの命（ミコト）が、比和町の吾妻山まで帰ってきたとき、「噫々吾が妻よ」と呼んだことで山名がついたといわれている。著者は、これは附会譚で地名の由来ではないと断じて、あづまのツマ（端）は「つまった所」、行き詰まったところ、奥まったところ、端の方の山、ということになる。「あ」は接頭語。しかし、これは「吾が妻よ」の方がロマンチックで良さそう。探求を重ねて本まで出版した木村さんだが、当初の疑問である「なんでミヨシと読むの？」の答えは見つけられなかったようである。

「ぐんぐん伸びよう会」

（教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ）

親の心得 赤子には肌を離すな 幼児には手を離すな
子供には眼を離すな 若者には心を離すな

先日、紀元前 86 年に創建され、現在、2100年以上の歴史のある埼玉県秩父市の秩父神社に参拝してきました。そこで「子宝 子育ての虎」の彫刻師 左 甚五郎作の作品に添えられた「親の心得」を紹介いたします。



無料体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせくださいね。

対象者：0歳～小学6年生



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「天路の旅人」

沢木耕太郎 著 新潮社

第二次大戦末期、25歳の西川一三は日本軍の密偵として、中国大陸の奥深くまで潜入する。チベット仏教の蒙古人巡礼僧になりすました西川一三は、戦争が終結したあとも旅を続け、チベットからインド亜大陸まで足を延ばすことになる。昭和25年にインドで逮捕され日本に送還されるまでの記録を自身で書き記したのが、「秘境西域八年の潜行」（芙蓉書房）である。



その本を読んで西川に興味を覚えた著者が、西川の住む盛岡に通うこと1年。さらに本書が出来上がるまで、初対面から25年の歳月が流れている。日本に帰国後の西川の生活も描かれていて、冒険紀行文学としての魅力が満載！

「アンデルさんの記」

獅子文六 著 角川書店

セシル・アンデルゼン夫人の一代記。大磯の地元の人からは、アンデルさんと呼ばれている。父親は英国人で、日本の鉄道敷設のために来日した技術者。その英国紳士が金物屋の娘に恋をして、結婚して生まれたのがアンデルさんなのである。

父親の急死やエドワード・アンデルゼンとの結婚、関東大震災、最愛の夫との死別、戦時中の容貌からの迫害&貧困等々。彼女は生来の素直さと誠実さにより、周囲の人に守られて、89歳の今（当時）も慈善活動に取り組んでいる。本には書かれていないが、獅子文六自身、フランス女性との結婚で長女をもうけている。



「神童」

さそうあきら 著 双葉文庫

名門音大を目指して浪人中の菊名和音は、小学5年生の野球少女、成瀬うたと知り合う。亡父が指揮者で、幼い頃よりピアニストになるために教育されてきたうたは、母親に内緒で野球をやっていた。うたの演奏を聴いて感銘を受けた和音は、懇願してうたのレッスンを受けることになる。



うたの破天荒な性格が痛快。見栄っ張りが高圧的な母親は相当な毒親なのだが、どこか憎めない。和音は耳が良いだけの平凡な好青年だが、その素朴さが輝いて見える。天才少女ピアニストは、伝説的な巨匠に見出されて世界の寵児となるのだが、耳のトラブルで失聴の危機に。全3巻、最期の演奏に感動！

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

文学探訪

庄原と「百三の青春」⑧

百三が憧れた少女たち——幼少・少年期を中心に

音谷健郎

倉田百三は、幼くして恋多い子どもだったと言われます。自伝的な作品『光り合ういのち』（1940年刊、2002年復刊版）には、旧制中学3年の時に1年間、休学して滞在した尾道で4人の“恋人”と出会ったいきさつが描かれています。一方で「どうも創作が入っている」と、この作品の資料的価値を認めない人もいて、判然としません。

でも手がかりとして、この尾道の百三探索から始めます。年譜から換算して、時は明治39（1906）年4月から翌年3月まで。「脚気」の療養と学校に届出て、商店街で洋品店を営む親戚に嫁いだ3女種子の家に滞在します。本心は、このまま田舎者では恥ずかしい、都会的なセンスを身につけたいというのです。尾道は港町で明るく、洋風で活気

のある町でした。百三は庄原から人力車で尾道へ。帽子と伊達めがね姿で登場するのですが、種子から「何よ、その格好は」と早速に笑われます。尾道で出会った4人の女性とは、山腹の令女「鶴子」、活発な町娘の「すみ子」、丑寅神社社家の「鈴子」、ハワイ生まれのスポーツ少女の「安子」です。

出会いを辿ってみます。「鶴子」は、街の西北に広がる山腹の茶園（別荘）から出てきた少女として出会ったのです。お下げ髪で色が抜けるように白かったのです。琴を弾く憧れの少女となります。

出会うことを期待し、在所をそつと探ります。山の中腹の千光寺で偶然に会い、以後、数度にわたって、言葉を交わします。家人同士で、雁治郎の芝居を見に行ったことがあり、百三は「美と恋の幻影」に惹かれます。鶴子はほどなく肺病の療養のため姿を消します。それだけに、百三にとつて、「年少の胸には深く深く残った」人となったのです。

「もつと楽しい、軽い、

そしてもう幾分性の好奇の芽ばえのあるような思い出も色々あった」として登場するのが、次の「渋谷すみ子」です。彼女は、反物屋の娘で、尾道なまりむき出しのおきやんで明るい娘です。店にもよく出入りし、心やすい仲になりました。

店では親類や得意客を招いて小島に渡り花見の宴を開きました。従兄に進められてガブ飲みする百三を、「止めたがええ、からだに悪い」と止めるのはすみ子でした。従兄は「いよう、貞女だな」とからかい、すみ子は真っ赤になるのです。他の宴席でも、「看護させてつかあさい」と側にいるのは、すみ子でした。百三は「少年と少女との愛の手習いのような、淡いものであったろう。しかし私の女性への観照と感覚はこうしたことから育っていったのであった」と締めくくっています。

洋品店の裏門から出て「千光寺山に登る山ふところ林にかこまれた神社があった」と紹介されている「丑寅神社」は、いまでも同じたたずまいの「良（うしとら）神社」のことでしよう。氏子総代の伯父に連れられて参詣して、巫女の「鈴子」の舞を見て、美しいと思うのです。別の日、境内の水を飲もうとしたとき、家から



西城の百三文学碑。「西城川に花を——」の文章が彫られています



百三の文学碑から見下ろした西城川。左方向が下流で、庄原方面



尾道の良(うしとら)神社。百三が巫女の「鈴子」と熱心に短歌問答をした境内

茶碗で持ってきてくれたのが鈴子でした。「富士額で、刻んだような美しい鼻を持ち、背丈が高く、鹿を連想させた」のです。

以後、宮司が講義する万葉・古事記の勉強会を聴講。この春、女学校を出たばかりの鈴子も、万葉集の歌に執心で、2人並んで学ぶのでした。やがて、2人の間で歌の話が弾み、歌のやりとりをするまでになります。

「じゃあこの歌はどうだ」「万葉でしよう」「おどろいた。僕の歌だよ」「あなたの歌？ うまくなったわね」「馬鹿。君のことを詠んだんじゃないか。君は鹿に似ているからさ」――。この弾む会話はどうだろう。少年少女

が、わずかの間にここまで闊達になるでしょうか。百三の創作が混じっていると言われるゆえんです。「二人は夢に充ち、歌に充ちて幸福であった」と、この項を結んでいます。

最後に登場する「安子」は、貧しい養鶏場の娘だが、活発なスポーツ少女で、百三が三次中学に復学した後の生活態度に、大きな影響を与えたのでした。

百三が、土手で遊んでいる子どもたちに、英語でデタラメにしゃべりかけて遊んでいると、さも可笑しうに立ち止まっていたのが彼女でした。別の日、浄土寺の境内でテニスをやっていた彼女たちに誘い込まれたのです。彼女は色浅黒く、美しいとは言えないが、「気持ちのいい、率直な性格」でした。

近くの高見山に登った時は、岩伝いに敏捷に歩き、百三は「存外弱脚だわね」とからかわれ、屈辱を感じ、「私は身体を練らねばならぬ」と心に誓ったのでした。

安子は自転車に乗って颯爽と家の用事をし、テニスに誘っても「あたし鶏小屋の掃除、お洗濯やらいそがしいのよ」といい、百三は自分からぶらしているのが気に差すようになるのでした。

さらに、安子が市の勧工場(一種のマーケット)の見張り番をしているのにも接した。「学校を休んで、華やかな街をあこがれて来ている自分のことが浮いた、のんきな、しゃれもののような気がして恥ずかしくなった」のです。「わたしはもう田舎の中学校に帰って勉強にしようとする時決心した」のでした。こうして「多感な思い出」を残して尾道を去ります。

これらは、女性遍歴といった浮いた気持ではなく、自分の成長の糧を見いだそうとする、大まじめな作品です。特徴的なのは、百三はどの少女にも憧れの気持を抱き、自分を侮つたと攻撃するようなマイナス思考が寸毫もないことです。後の百三の女性関係を考えると参考になると思いました。

尾道遊学から少し遡りますが、西城でのエピソードにも触れておきます。

西城町の西城川開明橋の少し上流に「倉田百三文学碑」の石碑が建っています。「花束を西城川に流し給え、庄原の川べで、漂い来るのを拾いましょう」と刻んであります。三次中学の級友で西城に実家のある小田稔(シリーズ⑦に登場)の妹、純江への

恋心を書き送ったのです。そんな気持を、常に何か形あるものに残したいというのが百三の性癖のように思えます。

少年の恋心の仕上げは、尾道から帰って、中学の上級生になった頃です。知り合ったのは、よく訪ねた担任の先生の親戚の娘「小泉時子」です。2歳年上で、広島的女学校を首席で卒業しています。気が合い、手紙のやりとりを重ね、「彼女と結婚して、草深い田舎の実家を継ごう」とまで決心します。時子自身をはじめ百三の両親、叔父たちも乗り気でしたが小泉家から、まだ学生の身で、「丁重に謝絶」されたのでした。

この失恋に同情した父吾作が、一高進学を許すのです。吾作は、早大の「商科」を勧め、呉服問屋の跡継ぎを期待していたようです。三次中学で文芸部として活躍していた百三ですが、まだ文学が一生の仕事とは思っていなかったのでしょうか。

念のためですが、『光り合ういのち』には、旧制中学で流行の「美少年」「同性愛」なども赤裸々に描かれています。

次回10月号は休載し、11月号で『出家とその弟子』と庄原』を取り上げます。

虫と草木と人びとと⑦8 中村慎吾 「ひろしま山の歳時記」

トチノキ——豊饒の大栃

神話の満ちる比婆山の麓、熊野の里にトチノキの巨樹がある。樹齢六百年と推定されているこのトチは、「熊野の大栃」と古くから人々に親しまれている。まるで神代の昔から里の鎮守として里人を見守ってきた



かのような風格さえ漂わせている。根際で二本が連なっているが、太い方の樹高は三〇メートル、胸高幹囲は一二・六メートルもある。胸高幹囲とは人の胸の高さで測った幹回りのこと。一二・六メートルといえば、

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

大人が八人でやっと抱えることができすぎる太さである。幹の内部は大きな空洞になっていて、いつのころだったか、あるテレビ局が女子学生に入ってもらったところ、なんと二十三人も入れたそうだ。

熊野の大栃は全国屈指の巨樹、もちろん広島県一である。樹幹に大きな空洞を持ちながらも生命力は旺盛で、春には盛んに花をつけ、秋も深まる十月下旬、葉は美しく黄葉(もみち)する。「もみち」とはもみじの古語。今は紅葉と漢字で書くが、万葉の昔はもみじに「黄葉」と当てていた。

トチノキが黄葉するころ、その実も熟れる。トチの実は今も食品に利用されているが、古来、大切な食糧であった。ひよっとしたら古代人は、トチノキが黄色に色づくのを山の豊穡の目印としてその恵みを楽しむしていたところから、もみじに「黄葉」の字を当てたのではないか。豊かな秋を迎えたトチノキの実りを目の当たりにすると、そんな想像が膨らむ。やがて、紅葉狩りに象徴されるように、もみじが観賞の対象となる時代が来る。もみじの漢字表記が「紅葉」へ映った背景には、そんな変化があるのかもしれない。

クロツバメシジミ——花と蝶の運命

クロツバメシジミは地味な蝶である。羽を広げたところで、せいぜい幅は二二ミリほど。羽の色も黒っぽく、「森の妖精」などともてはやされ

ているミドリシジミ類のような優美さは乏しい。しかし不思議な魅力がこの小さな蝶に覚えるのだ。それはひよっとしたら、クロツバ

メシジミの食草、ツメレンゲのせいではないか。

ツメレンゲは日のカンカン当たる、街道筋の石垣や古い民家の屋根など、乾燥が激しく気温の格差も大きい、過酷な環境に限って生える。他の植物が敬遠する、人臭い場所に入り込んでへばりつくようにして花をつけるのだ。そんなツメレンゲを

食草に選び、自然の片隅でひっそり生き続けている蝶の姿に、惹かれるのだろう。

今、ツメレンゲは受難の時代にいる。旧家の屋根は葺き替えられ、石垣は道路の拡幅で取り壊されて、生地は次々と消えていく。それと共にクロツバメシジミも居場所を失いつつある。運命を共にする花と蝶の

姿に、私は、消えてしまつたいくつもの古里の風景を重ねているのかもしれない。

七月、ツメレンゲの肉厚の葉にもぐり込んで育った幼虫が羽化をす。ツメレンゲの周りをゆるやかに舞いつつ時折、その蜜を吸い、相手を見つけたりしながら、夏を過ごす。そして、秋に現れる次世代に、その命をつないでいく。



(写真はいずれも小川光昭氏撮影)

「つれづれ歌談」③9

松岡初枝

・萩の花尾花葛花瞿麦(なでしこ)の花女郎花(おみなえし)また藤袴朝貌(あさがほ)の花

大伴家持

秋の七草はこの歌で定着したと言われ、朝貌はききょうの花のことです。家持が秋の野であれやこれやと吟味した花の中で、秋の草花の一番手は萩の花でした。

・秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋の露置けり 大伴家持
秋の野に咲いた萩が秋風になびく。その上に露が置かれていることよ…。萩と露はいつもセットのように詠まれ、秋の歌のコンビです。

・わが背子がかざしの萩に置く露をさやかに見よと月は照るらし

作者不詳



私の好きな彼が髪にかざしの花を挿しているの、ステキ！でも萩の上に置く露の美しさも見なさいよ、と月に諭されちゃった…。当時はかざし(かんざし)は男女共に挿したので、力士が髪に花を挿して入場する道を“花道”と言い、それが今に残っているのです。

作者不詳

秋萩の咲いた野辺では、雄鹿が

露を別け別け鳴いて彼女を求めているよ…。秋の花萩、そして上には露、さらに鹿とくれば秋のフルコース。鹿は動物の中では68首と二番目に多く万葉集に登場しています。因みに一番多い動物は馬で、95首。鹿は身近な動物ですが、当時鹿は、その身が役立つ生き物の筆頭でした。角は飾り、耳は墨入れ、目は鏡、爪は弓掛け、毛は筆、皮は貼り皮、肉、肝はなます、モツは塩辛にと、捨てるところが無い。風流に歌に詠まれている鹿も、薬膳といわれる鹿狩りで仕留められ、死して大君の薬膳となったのです。鳴く声が哀れみすら感じさせます。

(わお！)

心の中で歓声を上げた。ヤマハU1D、アップライトピアノの名器である。1959年から1965年にかけて製造されていた古いピアノだが、大切にされていたのか塗装もきれいで輝いている。

ベンチタイプの椅子に腰かけると、かなり高い。小柄な人が弾いていたのだろう。椅子のサイドにあるネジ式のツマミで低く調整した。鍵盤カバーを上げて、両手の指を組んで腕を伸ばし、肩甲骨を開いてポキポキと指の関節を鳴らした。苦笑する。いつの間にか、おやじの癖がうつってしまった。

キイになる鍵盤をいくつか叩いてみる。やさしくてきれいな音だ。持ち主の愛情が伝わってくる。低音は重く響いて、高音は軽やかに澄んでいる。グランドピアノに負けていない。いくつか気になる箇所はあるが、定期的に調律もされていたようで、破損や故障はないようだ。

「いいピアノですね」

そう言うと、山中さんが破顔した。「おふくろは、中学校の音楽の先生だったんだよ。休みの日は、このピアノでずっと練習していたな。おれは音楽はまったく駄目で、野球ばっ

かりしてたんだが、おふくろが弾くピアノを聴くのが好きだった」

昔、ジャズバンドを組んでいたメンバーが亡くなって、焼香するために広島まで来た。実家の運送業を継いでいたが、酒好きは治らなかつたようで、肝硬変を患っていたらしい。頬を膨らませてトランペットを吹く写真が、仏壇に飾られていた。旅好きなので、せっかく広島まで

ピアノ

現代御伽草子 ⑧4

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

来たのだからと、芸備線に乗った。赤字ローカル線で、存続が危ぶまれているという記事を読んだことがある。備後庄原駅で降車した。

少し町の中を歩いてみようと思いがちだったが、店らしい店もない。寂れた商店街に古本屋を見つけて入ってみた。そこで見つけたのが、「大人のピアノレッスン春夏秋冬」だった。四冊セットで五千円は良心的だった。

CDではなくLPレコードが付属しているのが出版された時代を表している。

「レコードが一枚、入っていないのですが、大丈夫ですか？」
レジでそう確認された。それぞれ二枚のLPが入っているはずなのに、「冬のピアノ」には一枚しか入っていない。そのことは、値札にもきちんと赤字で書かれている。

のだという。

「どこから来られたの？」

「はあ、東京から」

「へえ、なんでまたこんなド田舎に？」

「ずけずけ物を言う人で、話が弾んだ。」

「実は、このレコードのピアノを弾いているのがわたしの父親なんですよ」

私立の音楽大学の助教授だった。

「じゃあ、あんたもピアノニストなの？」

苦笑を浮かべた。不詳の息子だ。父親の期待を裏切って、クラシック界から逃げ出した。堅苦しい音楽は性に合わないと言いつつ、コンテストが怖かったのだ。今はかろうじて、メーカーのピアノ講師として食いつないでいる。

「おふくろが使っていたピアノを見せてくれないかな。粗大ごみに出すのはしのびなくてね。古いからもらってくれるところもないだろうし」

断ることができずに、山中さん宅を訪れた。

何か演奏してくれという要望に、教則本の「春のピアノ」を取り出して、ぱらぱらとページをめくった。とりわけ書き込みの多いページを見



つけた。「乙女の祈り」、ポーランド人の女性音楽家、テクラ・バダジェフスカが作曲したロマンチックな曲で、日本でもなじみが深い。譜面台に本をセットして、呼吸を整えた。大きく指を振りかぶって、開始の高らかなファンファーレ。初心者向けの作品だと言われているが、難しい奏法も散りばめられている。一オクターブ離れた同じ音を同時に弾くオクターブ奏法、そして和音を分散させて弾くアルペジオ。隣り合う音を交互に細かく弾くトリル……。弾き終わると、思わぬ方角から

拍手が聞こえた。九月に入っていたがまだ残暑が厳しく、縁側のガラス戸を開け放っていたが、そこに五人ばかり並んでいる。おかつば頭の女の子が目を輝かせている。あとは祖母と両親だろうか。「入って、入って。コンサートは始まったばかりだから」

山中さんに促されて、それじゃあと家族が居間に上がって腰を下ろした。「もっと観客がいた方がいいよね」

山中さんがガラケーを取り出して、電話をかけた。わたしはあるアイデアがひらめいて、「秋のピアノ」からレコードを取り出した。ステレオコンポのレコードプレイヤーのターンテーブルにLPをセット、針を落とすと、ゆったりと荘厳な音が響いた。

「月光」
女の子が叫んだ。ピアノを習っているのだろう。ベートーヴェンのピアノソナタ第14番。「月光ソナタ」という愛称は、ドイツの音楽評論家で詩人でもあるルートヴィヒ・レルシュタープのコメントに由来する。ベートーヴェンの死後五年が経過した1832年、レルシュタープはこの曲の第1楽章がもたらす効果を指

して「スイスのルツェルン湖の月光の波に揺らぐ小舟のよう」と表現した。

おやじが得意にしていた曲だ。愛機であるスタンウェイのピアノの音色が懐かしく響いた。勘当が解けないままに鬼籍に入ってしまった。

テンポの上がる第二楽章に入ってから演奏に加わった。フリージャズの伴奏である。骨太のおやじの旋律に、軽快なリズムを乗せてゆく。こうして合奏すると、おやじの心が見えてくる。武骨で頑固な強面の奥底に、細やかな愛情や優しさが隠れている。

アップテンポの第三楽章に入ると、歓声が上がった。椅子から立ち上がって、全身でリズムを刻みながら演奏した。いつの間にか手拍子が起こっていた。おやじがニヤリと笑ったような気がした。

山中さんから年賀状が届いた。あのピアノは市に寄贈して、駅の構内の待合室に設置されることが決まったという。駅のストリートピアノである。また弾きに来てくださいと書いてあった。わたしも知り合いに声をかけて、細々とだがバンド活動を再開している。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。(ただ今閉鎖中)
- ・地元の絵葉書、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

九月三日奥州藤原氏滅亡一一八九
(文治五年)年

奥州藤原氏は、平安中期から末期に陸奥・出羽を支配した豪族。初代清衡以後、基衡・秀衡・泰衡と平泉を拠点に勢力を延ばした。律令体制からはみ出た、半独立的な土着王国であった。このような王国が存在する限り、国内全土の統一的な支配は



望めない」と頼朝は考えた。だからこそ頼朝は宣旨も待たずに出陣へと踏み切った。

『吾妻鏡』によると、軍兵二十八万四千騎とある。頼朝は、この大軍を東海道・北陸道・中道の三軍にわけ、次々と攻略し勢いにのった鎌倉勢は八月二十二日に敵の本拠地平泉を衝くことにした。

泰衡は、この日藤原氏三代の栄華の跡に自らの手で火をかけ、姿を消したが九月の初め、郎従河田次郎の裏切りによって首級をあげられた。この地に対する頼朝の土地支配権は、朝廷から全面的に承認された。

九月七日安政の大獄一八五八(安政五年)年

大老井伊直弼が行った尊王攘夷運動への大弾圧事件。勅許(ちよつきよ)を得ず日米修好通商条約を結び、また家茂(いえもち)を第十四代將軍としたことに反対した諸大名・公卿・志士らを投獄、処刑。

安政大獄の本筋は、水戸の陰謀摘

発にあった。それは、朝廷が違勅調印を諮問する勅諭(ちよくじょう)を八日水戸藩主徳川慶篤に伝えた。十日にそれが幕府(大老井伊直弼)に伝達されたので大問題となる。天皇が將軍を飛びこえて直接水戸藩主

に行動を求めたわけで、水戸藩が朝廷と結んでの反逆を疑った。水戸藩にはそんなつもりはないし、すぐに幕府に報告させた。しかし、幕府側は、

前水戸藩主斉昭の言動、斉昭の実子一橋慶喜の將軍継嗣問題で、水戸を謀反人の巢窟のようにみなしていたので、取りあえず、この勅書を水戸へ下すことに携わったのは誰かという線で捜査を開始。梅田雲浜逮捕はその線上にあり、大獄のスタートでもある。

九月十日川中島の戦一五六一(永祿四年)年

戦国時代、甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信の戦い。両者は天文二十二(一五五三)年から永祿七(一五六四)年八月の最終戦まで五度、千曲川と犀川の合流点に位置する川中島で激突。信濃は信玄の所領となる。起因は、信濃の豪族村上義清らが、信玄にその領土や居城を奪われ、越後の春日山城に遁れ、失地の回復を謙信に求めたことに始まる。

※写真は上杉謙信の太刀を武田信玄が軍配で受け止める像(長野市八幡原史跡公園)。
九月十五日関ヶ原の戦一六〇〇(慶長五年)年

秀吉が臨終の時に成立した五大老と五奉行を主体とする豊臣政権は、五大老の筆頭徳川家康が秀吉の遺令に違背した行動に出たため動揺をきたした。五奉行の一人石田三成が中心となり、家康の違背を指摘し、横暴を科めたが、効果なく秀頼の豊臣政権は分裂を期した。家康は、慶長五年七月会津遠征をして、三成に挙兵させるよう企てた。そして九月、

東軍徳川家康、西軍石田三成、両軍十数万が関ヶ原で激突した。結果、三成・行長らは処刑された。

九月十九日正中の変一三三四(正中元年)年

鎌倉末期、後醍醐天皇の幕府討滅計画未遂事件。天皇は側近、日野資朝・俊基らと討幕を計画。未遂に終る。この日は、北野社の祭礼にあたり、毎年の様に喧嘩沙汰が起るので六波羅の兵は警備に出るのでそのすきにと、計画したらしい。処分は、天皇お構いなし、俊基は釈放、資朝は佐渡に流罪ということで誠に寛大であった。

「エコ・ツーリズム」

視察旅行で銃の警護

山崎 允まこと

面倒なレポート作成が終わったので、半日ばかりで趣味のスケッチ(写真)。

画材は長距離バスターミナルの赤い大型バス。ドラム缶の燃料をバスに給油している兄ちゃん2人、多分運転手と車掌であろう。その横では荷物となるベッドのクッションの上に無造作に寝転んでいる兄ちゃん2人、頭に荷物を載せてバスに乗りに来たおぼちゃん、バス乗車口あたりでたらずむ大人と子供たち。何を話しているのだろうか？

その翌日、2002年9月25日から7日間、「エコ・ツーリズム」の旅行商品を仕上げるために東部州に出かけた。「エコ・ツーリズム」とは、地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を観光客に伝えることで、その価値や大切さが住民達にも理解され、保全につながっていくことをめざしていく仕組み、と定義されている。日本では「スターディー・ツアー」といって東京から一日がかりで酒蔵を見学したり、盆

裁ビレッジ(村)を案内していた例があった。

東部州のWCS(Wildlife Conservation Society: 海外の課題に取り組む非政府組織)を訪れた。野生動物の保護を目的として、貧困のため密猟者になっていった農民達から手作りの銃やワイヤーで作った仕掛け罠を回収し、代わりに農民達の農地の土質の改良、作物の植え付



け、買い取り、養蜂・養魚の指導をしていた。

村のデポ(倉庫)には、密猟者たちから回収した手作りの銃や、罠が展示され、壁にはそれらの動物たちと村人たちが仲良く暮らして(?)いる絵が描かれていた。

畑を荒らす象対策用に、電柵を張り巡らせている。電柵の高さ、広さ、大きさ、頑丈さはびっくりするばかりか、人間にとっては電流が象以上に危険なものでもあることを絵でもって周知させていた。酋長(村長)のパレス(簡単な平屋)の訪問IIホームビジット、小学校の訪問を組み入れた商品にした。日本から持参した八幡小学校生徒の絵の数点がここで役立った。

宿舎は、WCSが農民達に指導して運営している「ブッシュ・キャンプ」(簡素な宿泊施設)に体験宿泊することになった。ところが、屋根がついているだけで、ドアがなく、水回りの設備(トイレ、洗面、シャワー)も装備されていない。とりあえず、マラリアにかかりたくないのので、1時間かけて蚊帳を取りに帰ってもらった。別棟に和式風のトイレがあったが、ドアなし、蠅がいっぱい、臭いもいっぱい。

ソ連製の「she」と言う銃を持ったレンジャーが同じ部屋で添い寝(?)してくれた。彼は銃を抱いたまま横になるや、すぐに本格的ないきをかき始めた。翌朝、ヘンリーがすぐ側(そば)の川で沐浴しているのを見て、自分も真似した。男達ばかりだからどんな姿でも恥ずかしくはないが、いっどこから突進してくるか分からないライオンや、足元の川底に潜むワニ、顔に似合わない獐猛なカバの出現を警戒して、銃を構えたレンジャーが今度ははっきり見張りしてくれた。

無事に視察を終え、多くのレポート用の宿題をかかえて首都ルサカに帰る途中だった。ながくて真つすぐな上り坂を登っていると、道端に赤い大きな箱のような物体がたまたまんでいた。ヘンリーが「ミスタ・ヤマザキ、バスターミナルでスケッチしていたあのバスですよ!」。窓ガラスは全部破損して、見るも無残に疲れ果てた姿でたらずんでいた。かけてあげる言葉も見いだせなかった。翌日ヘンリーが教えてくれた。バスの運転手の飲酒運転で、スピードの出しすぎで横転。死者1名、重軽傷者48名、ドライバーはその場から逃げて、翌日捕まったとのこと。

どらくる俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

牧野富太郎の句碑や花野中

近藤 昌平

桔梗咲き花に葉脈のあるを知る

富久光

外出を躊躇している極暑かな

片岡 正人

蝉時雨背負ふて歩くふる里よ

隆愚

ガレージにくちなは寝る昼下り

大槇 三代子

ほそき腕あやす笑顔や汗にじむ

寺内 龍二

吐く息に命削らる酷暑かな

赤川 冬人

四年ぶりの七夕祭り人ごみに

松岡 初枝

親しかりし人の訃報聞く夜辺

投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「萩」

秋の七草は、萩・すすき・葛(くず)・
なでしこ・おみなえし・藤袴(ふじ
ばかま)・桔梗といわれています。
「萩」は古来、秋を代表する草と考

秋は鹿の恋の季節ですから、萩の

そばでよく鳴いていたのでしよう。
鹿鳴草・鹿妻草・鹿花妻、などの異
名が残っています。散る花も「こば
れ萩」といつて愛でられていました。
一つ家に遊女も寝たり萩と月

松尾芭蕉

「フロイドの言葉」 赤川仁洋

暑いので本の整理をする元気もな
く、ユーチューブで時間潰し。フロ
イドの名言というタイトルの動画を見
つけた。精神分析を創設したオー
ストリアの精神科医、ジークムント・
フロイドが遺した言葉である。余計
な解説はなく、ただただ言葉を読み
上げ、画面に文字を掲示するだけだ
がある。

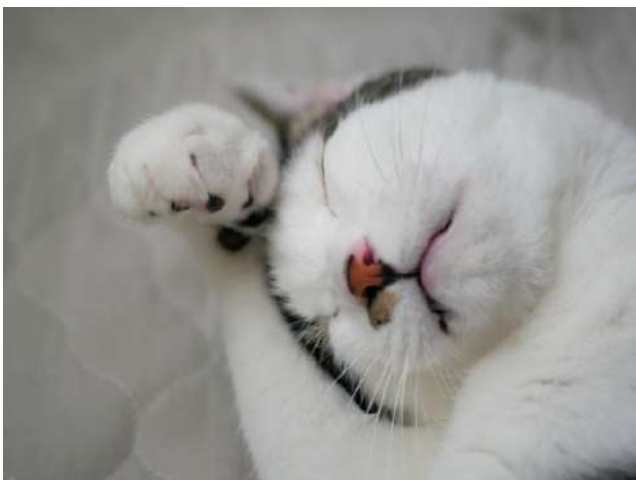
「成熟とは満足を先延ばしにする能
力である」、「力は、あなたの弱さか
ら生まれる」、「幸福になる方法は自
分で実験してみなければわからない」、
「女性は男性を和らげるべきだが、
弱めてはいけない」等々。

「実際、人は部分的にしか正常では
ない」、これは精神科医としての本
音だろう。

「生きる意味や価値を考え始めると、
我々は気がおかしくなってしまう。

生きる意味など、存在しないのだから」、これはぼんやりと感じていた
ことをズバリと言いつてられたよう
な気がした。フロイドの人生は過酷
で、ユダヤ人として迫害され四人の
妹をナチスの収容所で焼き殺されて
いる。

そして、「猫と一緒に過ごすこと
は、決して無駄ではない」。人生の
教訓？ それとも治療の一環？ こ
の言葉があったので、この原稿を書
いている。フロイドが猫を飼ってい
たかどうかは知らないが、心の底か
ら同意し共感するものである。



どらくろお 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろお ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：10月14日(土) 9:30～11:30

テーマ：「移住者の視点でみた、庄原の宝物とは」

講師：柳井徳磨氏

(獣医法医学研究所所長)

場所：生活交流館

(備後庄原駅隣接)

参加費：500円

(学生200円、お茶菓子代込み)

申込み&問合せ：080-3631-9125 (柳井妙子)



ちくちくはうす玉手箱作品展

場所：市民ギャラリーアート多愛夢

日時：9月8日(金)～10日(日)



くららお婆さんの紙芝居

場所：まちなか広場 ※駄菓子(50円)あります！

(9月9日、10時～、11時30分～の2回)

「おばあちゃんと小春とぼく」

(オリジナル作品)

エレクトーンミニコンサート

場所：吉岡中央堂前 (9月9日、10:45～11:15)

徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角でしています。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意！

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売(値札のないものは百円均一)。
毎週水曜日の朝に入荷予定。

●黒ニンニク好評販売中！●

(青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの
効果が期待できます。

(80g入り 500円)

※売り切れのときはご容赦ください。

編集後記

◇威勢の良い祭囃子を聞きながらこの原稿を書いています。店の前に椅子を並べて、庄原よいとこ祭りのパレード見物に使ってもらっています。猛暑にぐったりですが、元気をいただきました。

◇先月号5頁の写真解説で、倉田百三の墓石の戒名を「威々西行水楽居士」と記しましたが「威々西行水楽居士」の間違い、反省を込めて訂正します。

◇古本の在庫がいよいよパンク状態、申し訳ありませんが、本の引取&買取は当分の間休めています。

◇大変だった夏……、よくがんばりましたよね(しみじみ)。もう少しで秋風が吹いてくれますよ！

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン:ROUTE183

協賛:九日市愛好会

第264回

くんちいち

しょうばあ九日市

出店一覧 (順不同)

- ・文屋
- ・お福
- ・郷屋
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・クラフトショップ
- ・工房アム
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・17KITCHEN
- ・アーミッシュ
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・とらち
- ・健康企画グループ
- ・さだっさ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・克国水産
- ・田崎屋
- ・土遊び布遊び
- ・和み屋
- ・てしごと比和
- ・地域家族まなび場三軒茶屋
- ・柳屋
- ・かぐや姫



くらお婆さんの紙芝居

★オリジナル作品★ (駄菓子 50円)

場所: まちなか広場

開演: 10:00~、11:30~

9月9日(土)

9:00~13:00



TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
9月8日(金)~10日(日) 10時~15時
ちくちくはうす玉手箱(着物リメイク)

★エレクトーンミニコンサート
吉岡中央堂店頭(10:45~11:15)

- ★どら書房→休憩所あります!!
- ★風龍→九日市スペシャルで餃子200円!
- ★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
- ★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円

* 出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽楽座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

